

1970年4月23日に当時のナミュール・ノートルダム修道会総長シスター・メリー・リンスコットが来学し、全教職員・学生へ行った講話です。

ノートルダムの教育 — その理念と方針 —

シスター・メリー・リンスコット

あなた方の学長から教育について、特にノートルダム修道女会の伝統的な教育理念と、その現代への適応について皆さんに短時間話して欲しいと頼まれた時、私は二つのことを考えました。

一つはこのようにたくさんの学生に対して、日本の美しさ、あなた方の大学の価値とそこにおける教育的業績、また皆さんが勉強できる幸せということについて話すことができる喜びでございました。もう一つの反応は、このように大きな題目について短時間に一体何が話せるだろうかという困惑でした。しかしながら考えてみますと、ノートルダムの教育理念と教育方針というものは、結局、創立者であるジュリー・ピリアートに遡り、彼女の生涯、並びに信念こそは私達が今日のそして将来の教育に生かしていかなければならないものだということでした。

先ほども申しましたように、きょうお話しする内容は非常に広範囲にわたっているものです。そこで、簡単に言い過ぎるかもしれませんが、私はこれを三つの質問の形式をもって皆様と共に考えていきたいと思えます。まず聖ジュリーは何をした人であるかということ、二番目に彼女の教育理念は何であったかということ、そして三番目に今日の教育にこの理念がどのように生かされているかということです。

まず聖ジュリーは何をした人だったのでしょうか。この質問に答えるためには、まず彼女はどんな人だったかということを考えなければなりません。ジュリーは今から約2世紀前、1751年、北フランスの小さな村に生まれた一人の田舎娘でした。彼女の時代には教育の機会がごくわずかの人しか与えられず、社会の貧しい層の人達への関心というものは極めて少なく、女性の権利も認められていませんでした。同時にまた、革命と戦争へと導いた社会の中の不正とそして差別に対して、フランス人が戦いを始めていた時代でもあり、彼女が物心ついてからというものその生涯の大半は、国際的な争いの中に終始したと行ってよいと思えます。

彼女自身についてみれば、幸せな子供の時代を過ぎてからというもののは苦しみとそして失望の連続でした。彼女は30年間病の床につき、しかもその内23年間は半身または全身不随の身でした。しかしながら、この間、彼女は当時の人々が必要としているものを特別な方法をもって理解することができたようです。一人の女性として、一人の病人として、革命と戦いの犠牲者としての経験は、彼女に人々の中にある良さを見いだし、伸ばしてあげることがどんなに大切かということを示したようです。そこで彼女は他の人達もその住んでいる社会に益をもたらすような人になるようにと切望しまし

た。彼女はまた人間の尊厳とその権利に対して尊敬をはらうことを教えました。

彼女は奇跡的に癒され、話し、歩き、そして働くことができるようになるやいなや、そしてそれはすでに彼女が 53 歳に達した時ですけれども、今のようなことを果たす最善の道として教育事業を始めたのです。志を同じくし、彼女のように仕事を喜んでする人、すなわち数人のシスター達を集めて、当時最も彼らの助けを必要としていた人々、若い女性、貧しい人々、そして病人に自らを捧げたのでした。ジュリーは学校を開き、先生達を訓練し養成し、そして彼女自身も教え、そして他の人々も働きながら自分を高め磨いて行くよう励ましました。彼女はそれらの人々に喜びと勇気の精神を分かち、また謙虚に物事を学ぶ態度と、創造的な自発性、これらの精神を与えました。彼女は一人一人に関心をよせ、人に仕えること、また力一杯働くこと、信念を持ちながら明るく生きること、礼儀正しく人と接すること、これら一人の女性が与えることのできる全ての良い模範を示しました。

彼女はまた広い世界に対しての関心、視野を開きました。その広い視野と関心の成果が、今日彼女のたてた修道会のシスター達が、日本、南アフリカ、イギリス、ベルギー、イタリア、ブラジル、ナイジェリア、コンゴ、ケニア、ローデシア、そして北米全域にわたって大学その他の学校を創立し働いていることによってあらわされたといつてよいかと思います。かくて、ジュリーは何をしたかという質問に対しては、次のように答えることができます。すなわち彼女は 1804 年から 1816 年の間、フランスとベルギーに、19 か所いろいろな種類の学校を建てました。またはこういってもよいかと思いません。1804 年から 1970 年の間に 14 の異なった国、300 以上の場所に保育園から大学までありとあらゆる種類の学校を建てて、そしてこれからの仕事を貫く教育理念をうちたてたということです。

次に聖ジュリーの教育理念は何だったのでしょうか。これがきょうの午後、私達が尋ねる第二の質問です。時間が限られているために 4 つのポイントにしぼっていききたいと思います。

まず、ジュリーは教育を一人一人の人間の社会における全人的な発達の過程と理解していました。この過程は人格に関係しています。なぜならば一人一人は人格として重要であり、そしてその持つ人間の尊厳性の故に尊まれなければならないからです。教育は全人に関するものです。なぜならば全てにわたっての発達のみが一人の人間をその完成に導くことができるからです。それには肉体的、社会的、知的、美的、そして道徳的な成長というものがなければなりません。しかしながら、この発達は自己中心のものであってはならないのです。もし自己中心のものであるとしたら、それはビジョンを欠き、力ないものであるが故に枯れてしまいます。全人教育は他の人々との交わり、社会全体との交わりを待つことによるのみ得られるものです。

ジュリーはここにおいてバランスが保たれることの必要をみましました。社会は個人を必要とし、そして彼女と彼女独自の才能を生かしていく責任をもっています。個人はその成長のために他人を必要といたします。個人も社会に対して責任をもっているのです。

教育は社会における伝統と価値あるものを伝え、そして発展させていくという限りにおいて、また個人個人を社会における重要な人に仕上げていく限りにおいて、人間とそして社会との交わりにおける健全なバランスを保っていく大切な役目をもっています。このバランスはクリエイティブなものでなければならず、一度つくられたら動かないような固定したものであってはなりません。ジュリーは教育を一生涯続けるべきものと見ました。教育は個人が自ら成長していく過程において社会に適応し、社会を生涯にわたって形づくっていく意味で重要と考えていたのです。

二番目にジュリーは教育を一つの人権と理解していました。それ故に教育は全ての人に施されるものであり、誰もその年齢、性別または人種の故に差別を受けてはならないと考えていました。そして彼女自身、最も困っている人達に喜んで手を差し伸べ、シスター達も世界中の何処においても彼らを必要としている人の所に喜んで赴くようにと教えました。

三番目にジュリーは教育を人間の触れ合いに求めました。学校において教師と学生との関係は極めて大切で、それはお互い同志の触れ合い、そして経験の分かち合いによって得られます。そしてそのために教師にとっては価値、態度、知識そして技術における適当な教育施設、またその環境というものが必要となってまいります。

最後にジュリーは教育を開かれた一つのプロセスと見ていたようです。彼女は一貫して適応並びに成長をさまたげるような教育のあり方をしりぞけました。それどころかこの絶えず生きている教育というものをもって人々がお互い同志を理解し、そして尊敬しあうために、非常に重要な要素だと考えました。

さて、ジュリーの教育理念は今日どのように適応されるでしょうか。ジュリーが考えていたこと、それは今日非常に大きな意義をもっていると思います。ジュリーは個人の社会における成長とバランスが非常に大切であるということを強調しました。今日の社会は個人というものを中心に動いています。若い人達は特に人生の意味を求め、真の自分の姿を摸索し、人間としてあるべき姿になるために他人を必要としています。社会は変動し、この変化を速めようとして、時には暴力的な反抗もなされています。今、ジュリーが生きているとしたら私達に一人一人の人格を尊敬し、そして正しい信念に基づいて社会の改革に貢献するようにと求めることでしょう。建設的に社会に変革をもたらすためには、賢明な教育的配慮というものがが必要です。

今日の世界は専門的に優れた人々を必要としています。そしてジュリーもそうした準備を大切にしました。彼女は学校が高いレベルを保つことを絶えず奨励し、また今日生きておりましたならば、学位も卒業証書もそれなりに尊重したことでしょう。しかしながらジュリーは、それが教育の全てであり、また最も大切なものであるとは考えなかったと思います。私どもは教育をそれがどんなに高い学位であれ、学位とか卒業証書の獲得と同じに考えることはできません。月曜日のジャパントイムズの論説を読んでもらいましたら、そこにジュリーが求めていたと同じような考えが、教育と卒業証書の地位について書かれていました。論説を書いた人は卒業証書は確かに役にたち、そして必要

なものであるけれども、それはその人の教育を本当にはかるものではないということを書いていました。

ジュリーは、教育を生涯を通して英知と美と経験と真理に到達する成長過程とみておりました。それには終わりがありません。今や人々は45歳をもって第二の人生の始まりとしています。日本において顕著な技術の進歩というものは、多分、今までよりももっとレジャーを増し、定年を早めることでしょう。しかしながら、もし私達が完全な人間になろうとするならば、レジャーは単なる暇つぶしではありませんし、また私達の定年は成長の停止を意味してはならないのです。教育は、我々を充実した生活を送ると同時に、意義のある生活を送らせるに役立つものでなければなりません。

最後にジュリーは私達に真の教育とは私達をして、より深く他人を思いやり、理解するものだとして教えておられます。私達はこのような理解を個人のレベルにおいてもですが、社会において、また国際間においても必要としています。今、日本において、すばらしい国際理解の歩みがエキスポ70を通じてなされつつあります。これは非常に教育の高い国のみがよく成し得るところで、今後更にこの面で日本は大きな貢献をすることができるといえるでしょう。なぜならば、日本は技術的進歩がめざましく、特に東南アジアの発展においてリーダーシップをとることができるからです。昨日の毎日デーリーニュースは、日本の外務省がバンコックにあるアジア工科大学院において大学院のレベルでシビル・エンジニアリングの学問をするために、東南アジアの開発途上にある国から送られてくる学生の奨学金を組んだ予算を提出したということを書き込んでおりました。しかしながら日本のリーダーシップは技術面において終わってはいけないと思います。もし教育というものが、全人格の発展を意味し、また他人をよりよく理解することを意味するとしたらば、人間のあらゆる面において教育の効果が見られなければならないからです。

日本は美しい国ですし、工芸文化において多くの宝を持ち、また、道徳的にも優れておられます。日本の学生は日本の外交官です。彼らの心と魂の豊かさは物質的、技術的な豊かさと共に、人々がお互い同志をよりよく理解するために使われなければならない。その時こそ、彼らが受けている教育はビジョンと人格的な深みを持ち、そして将来に開かれているということができます。これこそは聖ジュリーのもっていたものでありました。そしてこれらの特徴が、ここ岡山で勉強している皆様をしるしづけるものであることを信じ、かつ、祈っております。

(渡辺和子編著『たいせつなもの』より)